



国書刊行会 2,625円(税込)

イスラーム信仰と現代社会

四戸潤弥(大学神学部教授)著

仏教、キリスト教、イスラームの伝来を 1. 受容と承認による国際社会での外交的地位の向上、禁令における低下 2. 外国文化の技術、政治文化制度の移入 3. 国内での「富と政治権力」の源泉としての生産手段である農地をめぐる世俗勢力と宗教勢力との争いという3つの視点で検討した。

伝来とは、公的権力による外来宗教の布教、および国民の宗教としての承認であった。仏教伝来は、東アジアでの国際的地位の向上と、律令体制導入と社会事業拡大を実現させ、一方、キリスト教禁令は幕末の不平等

条約という外交的地位の低下を招き、回復には50年近くかかった。

生産手段の土地が富と権力の源泉であった農業国日本において宗教勢力が土地を保有した結果、仏教は世俗権力と覇を争う政治勢力となった。平安京遷都は仏教勢力の排除を目的としていたし、戦国時代の一向衆は戦国大名と同じ武装勢力であった。その渦中に伝来したキリスト教の土地支配は新たな宗教勢力の誕生として時の権力者の秀吉に警戒心を起こさせ禁令とされた。檀家制度による政教分離実現までに千年近くかかった。

生産なき交易社会に生まれたイスラームは土地争いとは無縁であったが、戦前、満州国樹立により日本臣民にイスラーム教徒が組み入れられることが予想される中、公的権力の承認へ向かい宗教団体法として結実したイスラーム伝来となった。現代において外来宗教受容は日本の国際的地位を左右するのである。

著者より



法律文化社 3,360円(税込)

福祉政策の国際動向と日本の選択

ポスト「三つの世界」論

理橋孝文(大学社会学部教授)著

著者が社会保障や福祉政策の横断的な国際比較研究に関心をもち始めた1990年代初めころは、まだこの分野の研究蓄積はそれほどなかった。当該研究対象国の内発的な歴史的展開を踏まえたオーソドックスな外国研究との大きな違いであった。当時「色モノ・際モノ・光モノ」と自称していたものである。しかし、1990年代を通して、国際比較研究は内外で著しく進展した。それは何よりもエスピノーアンデルセン「福祉資本主義の三つの世界」の貢献に資する。その後、一方で国際比較研究が着実に進展し確かな地歩を築くとともに、他方でそれまでの分析枠組みでは捉えきれない新

しい事態が進展した。

ワークフェア、デーセントワーク、メイキング・ワーク・ペイ、タックス・クレジットなどのカタカナ表記の概念が目まぐるしく登場している。これら3つの概念はどれもポスト「三つの世界」論では重要なものであり、その正確な理解とわが国に示唆するもの、的確に捉えることが肝要である。本書の構成は以下の通りである。多くの方にコメントと批判を頂戴できればと思っている。

序章 福祉政策における国際比較研究 第1章 日本モデルの変容―社会保障制度の再設計に向けて 第2章 福祉国家の南欧モデルと日本、第3章 東アジアにおける社会政策の可能性 第4章 日本における高齢化「対策」を振り返って 第5章 社会保障への教訓、第6章 公的扶助制度をめぐる国際動向が示唆するもの、第7章 ワークフェアの国際的席巻、第8章 3層のセーフティネットから4層のセーフティネットへ、第8章 給付つき税額控除制度の可能性と課題、結章 「三つの世界」後の20年

著者より



日本武道館 2,520円(税込)

藩校・私塾の思想と教育

沖田行司(大学社会学部教授)著

「かつて時代の魁」となつて歴史を切り拓いた青年武士たちがいた」という序章(江戸の教育)からいきなり本書の熱い記述に魅入られた。武士や武士道に関する著作は近年数多いが、本書のようにその教育や思想を明快に説くものは知らない。

近世武士道の原点、名君の教育と政治、海外交流と武士の教育、歴史を動かした教育と続く第一部には、薩摩の造士館や熊本の時習館、会津の日新館から水戸の弘道館や長州の明倫館まで12の藩校と、徳川幕府の昌平

やすく紹介されている。第二部は中江藤樹の藤樹書院から吉田松陰の松下村塾まで9つの私塾の教育も、同様に一話完結で採りあげられ、どこからでも読み始められる。各章冒頭には1、2頁の概略があり、歴史的評価だけでなく現代教育との比較の中での意義が述べられ読みやすく工夫されている。理解を助ける写真や地図も数多く挿入されていてありがたい。

結章は「日本の教育とその再生」と題して、近代、現代教育史が要約され、新島襄の同志社英学校にまで論究されている。「自立した『国家の理想』とその実現を目指す自立した教育を持たない民族や国家は、国際真贋どころか自国の維持さえも危うい」との提言も含み、読み応えがある。文武両道を実践されている著者ならではの武士教育の規律や師弟関係の復権などの卓見も随所に盛り込まれ、自己形成のための学びの場が見えてくる好著といえる。

光川康雄(大学社会学部嘱託講師)



勁草書房 3,465円(税込)

ドウオーキン

法哲学と政治哲学

濱真一郎(大学社会学部教授)他編著

本書は、R・ドウオーキンの法哲学と政治哲学をテーマとした、日本における初めての論文集である。ドウオーキンはアメリカ出身の法哲学者である。彼の学説への賛否をめぐっては、研究者の間で意見が分かれているが、彼が今日最も重要な理論家の一人であることには疑いの余地はない。

日本でも、ドウオーキン独自の権利論や司法的裁定論などが、法哲学・政治哲学の研究者のみならず、憲法学・民法学の研究者からも参照されている。裁判官や弁護士といった実務家も、ドウオーキンに関心を抱いている。

る。

実定法学者や実務家が、ドウオーキンに関心を抱くのはなぜか。その理由の一つとしては、彼の理論が実践に内在的であるという点があげられる。彼によれば、法哲学・政治哲学は、実践をその外側から道徳的に中立的な用語で記述・説明するものではなく、実践をその内側で実質的・規範的・関与的に把握していくものなのである。

本書の各章は、以上のドウオーキンの研究姿勢を踏まえて、執筆されている。ただし、その研究姿勢に対して、本書の執筆者たちの評価は分かれている。本書における多様な視点の交錯は、本書の内容を活気あるものにしていく。

本書を契機として、ドウオーキンが提起した諸問題に関する日本における議論がさらに深まるようであれば、編者の一人としてこれに勝る喜びはない。

著者より



東洋経済新報社
3,990円(税込)

藩札の経済学

鹿野嘉昭(大学経済学部教授)著

江戸時代、わが国では西日本地方所在の諸藩を中心として、藩札と称される紙幣が地域的な交換手段として広く流通していた。本書は、この藩札の経済史的な意義、流通実態などに関し著者が15年余にわたって行ってきた研究成果を取りまとめたものであり、いわば藩札の誕生から消滅までの一生を議論するところに特徴がある。

それゆえ、本書での議論は多岐にわたる。例えば、各藩における藩札の流通実態を子細に検討のうえ、藩札の流通には多種多様なものがあると主張される。

それはまた、「大部分の藩札は幕末にかけて濫発され、価値下落あるいは兌換停止を余儀なくされた」という伝統的な捉え方の見直しを促している。

また、明治維新後、藩札は新貨に交換され、市中から姿を消すことになった。この交換過程は藩札整理と呼ばれる。本書では、藩札整理の実態についても数量分析の立場から分析し、藩札整理は全国一律のルールに基づき実施され、「勤皇の藩に甘く、佐幕の藩に厳しい」とはなかったことが明らかにされる。このほか、藩札は信用貨幣が政府紙幣かという藩札の性格や、いわゆる銭遣い経済圏をめぐっての論争についても、著者なりの見解が提示されている。

著者より



古今書院
2,940円(税込)

観光文化と地元学

井口貢(大学政策学部教授)編著

本書が上梓されたのは、昨年の夏のことであるが、原稿のゲラ初校が版元から届いたのは、あの3・11の東日本大震災からおよそ半月の後のことであった。「はじめに」の冒頭部分でそのことには、少し触れることはできた。しかしもちろん時宜にあわせた形で、本文を大きく全面的に修正することは、不可能ではないとしても、一般的には出来ないことである。故に一部の章に限って、数行の加筆があったものの、ほとんど初校のままできとどめた。

さてこの甚大な震災で復旧と復興が焦眉の急となつて、「観光どころではない」という声と



勁草書房
2,625円(税込)

女性と学歴

橋木俊昭(大学経済学部特別実習教員)著

私はこれまでに日本の高等教育、特に大学に関する著作をいくつ出版してきた。特に歴史の古い大学に注目して、その大学の歴史的發展を探求した。設立の経緯、研究・教育の推移、人材輩出力、現状などが話題だった。出版年の順序に従えば、早稲田・慶応、東京大、京都三大学(京大、同志社大、立命館大)となる。「女性と学歴」はそれに続くものである。これまでは少なくとも旧制に関しては男子が中心の学校ばかりだったので、今回は女性の高等教育の発展をたどったと言つてよい。

著者より

旧制の大学にあつては男子だけが学ぶことができたのであり、女子は排除されていた。女性はせいぜい女子専門学校のみで学んだのであり、ごく一部特例的に専門学校卒業後に旧制大学に進学したにすぎない。なぜ女子に大学進学がほぼ閉ざされていたかを論じてみた。

女子専門学校としては、東京女高師(現・お茶の水女子大)、津田女専(現・津田塾大)など数校を取り上げた。新制大学になってからこれらの学校は女子大学として昇格したが、共学大学と女子大学の並存という新しい時代を迎えた。換言すれば男子大学は、ほぼ存在しないのである。女子大学と共学大学の相違を様々な角度(外国の大学も含めて)から比較検討して、今後はこれら二つの異なる形態がどのように進展していくかを論じた本である。



学芸出版社
2,520円(税込)

地域資源を活かす温暖化対策

新川達郎(大学政策学部教授)他著

本書は、地球温暖化対策やそれにかかわる環境政策の実現にあたって、「グローバルに考え、ローカルに行動しよう」という考え方に基づきながら、調査研究を重ねた成果である。著者たちは約3年に亘る現地調査と共同研究の結果に基づき、本書を世に問うことができた。

本書の特徴を四点紹介しておきたい。第一に、温暖化対策が地域活性化になるとともに、地域活性化が温暖化対策にもなることを主張する。グローバルな課題解決には、地域社会、地域

経済、地域環境などの諸問題の解決が前提となる。

第二の特徴は、温暖化対策と地域活性化とを結び付ける視点として、地域資源に着目した点である。自然や社会、歴史文化など様々な地域資源が、地域活性化と温暖化対策にも活用可能なことを示した。

第三の特徴は、ごく小規模な中山間地域から大都市まで、さらに諸外国の事例も含めて検討した点である。また政策の担い手は自治体に限らず、NPOなど民間団体にも幅広く着目した。ともあれ地域特性を活かした温暖化対策が実際に地域の社会や経済に貢献していることがわかる。

最後になるが、第四に触れるべきは、地域社会がその市民や行政など、各主体の協働によって、地域資源を活かした温暖化対策・地域活性化策を構築する理論的筋道を示した点である。

著者より



晃洋書房
3,885円(税込)

翻訳の思想史

三ツ木道夫(大分大学グローバル・コミュニケーション学専攻)著

本書は2010年に提出、受理された学位論文(九州大学)を加筆修正したものです。平時なら、遅ればせながらの処女作をリルケのように「わが祝いに」と記念したことでしょう。しかし刊行のおよそ2週間後には東日本大震災が、さらに原子力発電所の事故がおきました。さらにその2週間後には「私事ながら」本書の上梓を喜んでくれた親族を見送ることになりました。こうして文字通りの「小著」は二重、三重に、筆者には忘れがたいものとなりました。

本書の内容をいかいつまんで申せば『ファウスト』の詩人ゲー

テからW・ベンヤミンの時代まで、この100年間に書かれたドイツの翻訳論を翻訳(に関する方法意識)の思想史として再構成したものです。ゲーテ、フンボルト、ニーチエ、ヴィラモール・ヴェイツツァー、メーレンドルフ、ゲオルゲ・クラリス、ベンヤミンが考察対象になっています。ある意味で2008年の編訳書『思想としての翻訳』(白水社)へのささやかな注釈集でもありません。出版(震災)から半年後によりやく、思想史家の高橋順一氏から懇切かつ精密な評価をえることができました(出版ニュース(9月11日号))。

最後に。小著は2010年度同志社大学「研究成果刊行助成」制度による出版経費補助を受けた書籍でもあります。記してご厚意に感謝します。

著者より



平凡社
861円(税込)

子どもの連れ去り問題

日本の司法が親子を引き裂く
コリンP.A. ジョーンズ

(司法研究科教授)著

以前から離婚後の親子関係が日本の司法制度でどのように扱われているかに興味があった。最近、「国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約(いわゆる「ハーグ条約」)がニュースの話題になることが多くなったが、研究を始めたころは、国内的にも多発している「子どもの連れ去り」や夫婦別居後の親子関係の断絶が一般のメディアにほとんど取り上げられず、離婚の増加にもかかわらずあなたかもタブーのようであった。

多くの離婚調停・裁判の当事者経験者と交流し、その生の声とともに、判例、文献、情報開

示請求で最高裁判所から入手した資料を基に、自分なりの問題(捉え方を)子どもの連れ去り問題(平凡社新書)という本にまとめた。刊行日が2011年3月15日と、震災直後だったことに加えて、その約2ヶ月後に国会が民法の親族編に久しぶりの改正をしたこともあり、出版されるタイミングはベストだったといえないかもしれない。

ただ、本書で何よりも問題として取り上げたかったのは法律条文の内容ではなく、それを司る家庭裁判所の姿勢だった。両親が別れた子どもの将来に重大な影響を及ぼす判断について、日本の裁判官は今もなお幅広い行政的裁量権を与えられている。その問題点が本書のメインテーマだったので、今でも参考になると思う(さらなる家族法改正のロビー活動の一環として、国会議員などに配布するという、著者にとつてありがたい購買運動も起きていると聞くが)。ご関心のある方は是非一読いただきたい。

著者より



現代思潮新社
2,730円(税込)

プララモン ―単数にして複数の存在

清水穰(大学言語文化教育研究センター文化教育)著

「プララモン」とはシュトックハウゼンの「ビュムネン」に表れる言葉で、Plural + Monismの合成語。単数のものが単数でありながらそのまま豊かな複数性へと開かれていくような性質を指す。「プララモニテイ」の反対語は「アイデンテイテイ」。

「多くのものが溶解して「一つ」になる(ニルヴァーナ)のではなく、「一つ」のものが「多くの側面を持つ(多義性)でもなく、別々の「一つ」のものが「多くのある(多様性)でもなく、本書は「一」にして「多」の存在として「写真」「音楽」「アート」「陶芸を論じる。

第1部は写真論9本。作家論のとりあえずの決定版として、東松照明、杉本博司、中平卓馬、古屋誠一を論じた。さらに作品分析として吉永マサユキの肖像写真、柴田敏雄のカラー、松江泰治のデジタル写真を論じ、キーワードとして「カラー」を、ステイヴン・ショアとマイケル・フリードを素材に整理した。

第2部はシュトックハウゼン2本。1つは彼の「ヘリコプター・カルテット」をネタに現代音楽史を整頓し、もうひとつはシュトックハウゼンの初期のバリ滞在を跡づけた。

第3部は現代美術。木村友紀の写真インスタレーションを分析した2本と、コラーージュの生成過程を整理しつつ青木淳の青森県立美術館を論じたもの。

第4部には陶芸を巡るエッセイ5本を納めた。東洋陶磁美術館の連続企画展展評3本を、鯉江良二論と、カリスマ骨董店古道具坂田「展」を斜めに批評したエッセイで挟んだ。著者より



アルテスパブリッシング
2,520円(税込)

デオダ・ド・セヴラック

南仏の風、郷愁の音画

椎名亮輔(女子大学学芸学部教授)著

デオダ・ド・セヴラック(1872〜1921)は現在、ほとんど知られておらず、忘れられた作曲家になってしまっている。だが、「当時の音楽家の中で、明確に印象主義者と呼べるのはドビュッシューとセヴラックだけである」(ミシェル・シオン)と言われるように、生前にはクロード・ドビュッシュー、モーリス・ラヴェルと並んでフランス近代音楽を代表する作曲家であった。しかし、パリのスコラ・カントルム(ヴァンサン・ダンディに師事)での勉学後すぐに故郷の南仏ラングドックに引きこもってしまったことや、49歳

という若さで世を去ってしまったことも相まって、数も必ずしも多くない彼の作品は、没後間もなく忘れ去られて行ってしまったのだ。

「彼の作品は自然から生まれてくる」と、すでに1906年に批評家ピエール・ラロは絶賛している。「光と影、風のささやき、大気に満ちたあらゆる生命、これら全てが彼の音楽の中で融け合い、その繊細でニュアンスと変化に富んだ、震える歌を包み込んでいく」。ドビュッシューもまた「彼は良い香りのする音楽を作る。人はそこで胸いっぴいに深呼吸するんだ」と述べている。セヴラックは、その絵画的なピアノ曲やオーケストラ曲、歌曲などで、生まれ故郷ラングドックの風景や人々を終生歌い続けた。

本書は、そのようなセヴラックの思想や作品の投げかける現代へのメッセージを読み解く本邦初の伝記。巻末に作品表、年譜、ディスコグラフィを付した。著者より



世界思想社
4,200円(税込)

フェミニズムと ヒロインの変遷

―ブロンテ、ハーデイ、
ドラブルを中心に―

風間未起子(文化学部教授)著

本書は、19世紀と20世紀の二つの世紀の双方向的な考察を試みたものである。

具体的には、イギリスの第一波主流フェミニズム(1840年代から1920年代)の性道徳を起点に、それに伴走する、あるいはそこから離脱する小説ヒロインたちの挑戦を3名の作家の作品から解き明かした。3名の作家は19世紀のシャーロット・ブロンテとトマス・ハーデイ、そして20世紀後期のマーガレット・ドラブルである。

このテーマに着目したのは、イギリス19世紀小説に浸透する

フェミニズムの原点を見据えることで、その行く手にある現代小説と19世紀小説の両方を照らし合わせてみたいという発想からである。

19世紀まで遡ることは、現代のフェミニズムの起源を知ることにつながるし、未来への洞察も促してくれる。

第一波フェミニズムの思想を小説ヒロインの生き方に重ね合わせていくと、矛盾を抱えながら奮闘するヒロインは、同時代のフェミニストの二律背反の真相をも鮮明に伝えてくれる。

本書では、20世紀初頭のモダニズムと急進派フェミニズムに重要な役割を果たしたフェミニスト雑誌『フリーウーマン』(1911年11月〜1912年10月)も取り上げて、進化するフェミニストにエールを送った。

なお、本書で取り上げた小説は以下の通り。ブロンテの『ジェイン・エア』『シャーリー』『ワイルレット』、ハーデイの『テラス』『ジュード』『帰郷』、ドラブルの『ひきょうす』『滝』『中間地帯』である。

著者より

『同志社時報』ご講読について

多くの皆さんにご愛読いただくために、118号(2004年10月発行)から購読料が無料になりました。送料(1冊につき切手200円)のみのご負担で定期講読いただけます。

●定期送付のお申し込み●

『同志社時報』は、4月、10月の年2回発行しています。巻末はがき、電話、FAXまたはe-mailで大学広報課までご連絡ください。ご連絡をいただき次第、「申込み用紙」を送付いたします。「申込み用紙」到着後、必要事項をご記入いただきご希望号までの送料(切手)を添えてお申し込みください。

●バックナンバーのお申し込み

下記まで必要経費分(購読料+送料)の切手を添えてお申し込みください。

(購読料) 1号〜51号 100円 52号〜78号 150円 79号〜117号 200円 118号〜 無料

(在庫切れ) 29号、52号、54号、79号、91号、95号、119号、123号

(送料) 1冊につき200円

●ご意見・ご感想をお聞かせください

巻末のはがき、お手紙、eメール等でお寄せください。

同志社大学広報課 同志社時報係

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

電話 075(251)3120 FAX 075(251)3080

e-mail : ji-koho@mail.doshisha.ac.jp